

久々湊盈子歌集

『非在の星』

(典々堂)

深い教養と揺るぎない思想に裏打ちされた骨太な歌集。

熟練歌人七十代後半の第十一歌集である。要所に漢語を置き、力強さ、雄々しさのある歌風。特に社会詠には責任感の強い生き様が反映されており、背筋の伸びる思いがする。戦争は実はそこまで来ていると赤トンボ空中にとどまりて言う。

日本軍の練習機が別名「赤とんぼ」であったと知る世代は、少なくなつてしまったことだろう。胸騒ぎを覚える。

おもむろに、かつは無慈悲に加速して搾木しぼぎのように老齡はくる

老いの普遍性に迫る歌。感情を抑え時間を冷静に見つめており、「無慈悲」「搾木」が実感を軋みながら伝えてくる。三日月は空の創口あすという妙薬に少しづつ癒えてゆくなり

ひりひりとした心の痛みには「あす」が妙薬になるという。揺れの感情を安易に抒情へ流さず、詩的飛躍を引き締まった表現にしている。覚悟のある本心で歌を詠み続けていることを、歌集名となった次の歌にことさら強く感じた。

冬の夜にまたたく星よ光年の昔に死にて非在の星よ  
星の光から「非在」という見えないものを厳しく炙り出し、光と闇の同在から生まれる歌に希望を託している。

(中村敬子)

俵万智歌集

『アボカドの種』

(角川書店)

病気の治療、子の受験、親、恋愛、コロナ禍などを詠う。

二〇二〇年から四年間、三七五首を取めた第七歌集。

息をしただけで上手と褒められる生まれたばかりの子の赤い  
子のように  
ベランダで見るときよりも窓枠を額縁にした月が明る

い  
しつかりと飯を食わせるだけの日々 息子のお下がり  
Tシャツを着て

ルーティンを増やしてごめん老母にはヤクルト1000が  
ストレスになる

明るくすつきりとした風通しのよい文体だ。なにげない  
事柄をプラスに変える不思議な力を、言葉から引き出す。

複雑になる世情のなかで、平明な言葉を用いて日常を詠む。また、この時代の歌人として、短歌を詠む姿勢をすつと提示する。芽吹くまで時間を含めて、静かで豊かな営みを実切にしている。

驚いたときの表現韓国は「まあー」と広げず「オモ  
…」と閉じゆく

日常のなかに多くの歌材を見つけ、心の揺れを捉えて歌にする。韓国ドラマを観て、ホストたちと交流して、心は柔らかく揺れる。NHK朝のドラマ「舞いあがれ！」の非

公式応援短歌などの取り組みも面白い。(中村 恵)